

1月末日、故郷鹿児島への帰省を終えたボクは、そのまま帰りの飛行機に乗るのをためらい、憑かれるように、西郷隆盛が没した城山にあるホテルに投宿した。およそ気ままに小学校時代の友に電話し、思わぬ快諾を得て、その夜、天文館で呑んだ。友が誘った店は、ごん兵衛という湯豆腐の老舗だった。店のおかみさん、どこかで見た人だと思ったら、旅行雑誌か何かで見た人だった。笑顔がとても印象に残っていて、行ってみたいと思っていた店だったので、奇遇を喜んだ。

故郷の友の数は4人になり、その夜は何とも楽しかった。だから、遠からずごん兵衛を再訪し、「あんた覚えてるよ」と、あのおかみさんに言われたいと、密かに企んだ。しかし、それはかなわぬことになったことを、友が転送してくれた地方紙のコラムで知った。ボクに湯豆腐を振る舞った一週間後、おかみさんは急死したというのだ。おかみさんは、久保享子さんと言い、享年77歳だった。店は彼女の母が1918年に開き、戦災を経て1949年に再開、享子さんも手伝うようになった。母をなく

してからは愛犬ごんと暮らしたが、ごんは、連夜店の前に座り、名物となった。そのごんも、一昨年11月に逝った…。地方紙は、ごん兵衛が91年もの歴史を刻んできたこと、その間、二代のおかみさんと愛犬が、無数の人々を慈しんできたことをかいつまんで教えてくれた。

「そこに行けば必ず誰かいる」と、地方紙は、おかみさんの絶やさぬ笑顔と気さくな鹿児島弁を重ね合わせて、この店のことを評し、それはまちの魅力だったと書いた。ボクは、いたく共感した。そして、やっぱり、まちづくりは続けないといけないと思った。ごん兵衛のように、このまちに溶けていきたいと思った。

そうか、もう、あのおかみさんはいないのか…。ボクは、人恋しさを持って余して、地方紙を繰り返し読みながら、あのごん兵衛の酒に、もう一度酔った。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



ふるさとからの訃報



ごん兵衛と在りし日のおかみさん（インターネットより）

hidajimafei's 「見るまえに跳べ」 曲

アナログレコードの逆襲その21
岡林信康「私たちの望むものは」
岡林信康アルバム第2集「見るまえに跳べ」から



68年、「友よ」（裏面は「山谷ブルース」）でレコードデビューした岡林を、僕は正直ポップ・ディランのフェイクと思っていた。とくにフォークギターからエ

った。部落という固有名詞を、日本で初めて歌詞にあらわしたのも岡林であった。それは音楽史のエポックであった。

「友よ」は、岡林のマスターピースには違いないが、ヒダリ系や組合連中が愛用するみたいないな風潮は嫌いだった。また当時革新派の候補者が、選挙カーのスピーカーからこの曲を無神経に流しながら走っていたが、音楽を政治に利用する腹立たしさを覚えている。

レキギターに持ち替えてのスタイルはディランそのままだったし、詩づくりも反体制だった。ところが「チューリップのアップリケ」「手紙」など、一連の被差別部落をテーマとする作品を発表した頃から、これはすごい歌手だと実感しはじめた。その頃、僕は「水平者宣言」を読み、部落問題に興味を持ち始めていた頃で、余計に興味をかきたてられたのだと思う。それはディランが公民権運動などメディアの場でブレイクしていく華々しさとは違い、アジアの片隅、ド田舎日本の現実問題を垣間見せてくれた新鮮さだ

70年、岡林は2枚目のアルバムを出した。大江健三郎の作品「見るまえに跳べ」に触発されたかどうか、このアルバム名も「見るまえに跳べ」だ。作品は岡林のブラックとユーモアとシリアスがマッチしていて、例えば「愛する人へ」「自由への長い旅」「今日を越えて」などは自省、内省を通して新しい価値を探り、「墮天使ロック」「ラブ・ゼネレーション」はともにロック前衛として最高にシビれる作品で、今も大好きな曲だ。「おまわりさんに捧げる歌」

や「NHKに捧げる歌」など、こんな曲を歌う歌手など今はもういない。

「私たちの望むものは 生きる苦しみではなく 私たちの望むものは 生きる喜びなのだ」「私たちの望むものは あなたを殺すことではな く 私たちの望むものは あなたと 生きることなのだ」。この歌詞で始まる「私たちの望むものは」の前半部は、無伴奏でゆっくりと立ち上がり、ポツンポツンとギターの音色が入りだす。しかし後半、私たちの望むものは「生きる喜びではなく 生きる苦しみなのだ」「あなたと生きることではなく あなたを殺すことなのだ」と前文否定してしまう。これが岡林の真骨頂だと思う。その意味を、中盤「私たちの望むものは くり返すことではなく 私たちの望むものは たえず変わっていくことなのだ」というフレーズを使い明確に歌われる。岡林よもう一度。